



Title	列女傳の刊本及び頌圖について
Author(s)	宮本, 勝
Citation	北海道大學文學部紀要, 32(1), 1-36
Issue Date	1983-11-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33476
Type	departmental bulletin paper
File Information	32(1)_PR1-36.pdf



列女傳の刊本及び頌圖について

宮 本 勝

はじめに

先ごろ、列女傳索引の刊行に際して、序文の解説を擔當した。當初は次の三點について詳細に論ずる豫定であった。

- (1) 列女傳の作者について
- (2) 列女傳の制作目的について
- (3) 列女傳のテキストについて

しかし、實際には、紙幅や期日等の制約もあって、序文においては、(1)作者の考究に重點を置き、(2)制作目的、(3)テキストに關してはその概略を述べるに止まった。そこでこれを補うため、(2)制作目的については、中國哲學第十一號⁽²⁾において、「劉向と列女傳」と題する考察をすでに發表した。

この小論は殘された(3)列女傳のテキストの問題に關して、索引序の略を補完するのが目的である。特に、刊本と頌圖とを中心⁽¹⁾に次の順序で述べたいと思う。

(一) 現存刊本について

列女傳の刊本及び頌圖について

(二) 歷代著錄資料について

(三) 劉向舊書と曹大家注本について

(四) 曾鞏編定本について

(五) 蔡驥刻本について

(六) 頌及び頌の作者について

——附・續列女傳の作者について——

(七) 圖について

——附・晉顧凱之列女傳圖について——

(八) 江南本列女傳圖の殘卷について

(九) 南宋・建安余氏刻本と清・阮福覆宋本の繪圖について

最後にまとめとして劉向舊書より今本列女傳に至る經緯を圖式的に示しておくので参照されたい。

(一) 現存刊本について

今本には次の①～⑩が存し、それは宋本を覆刻したもの（覆宋本）と明刊本との二系統に分かれる。
△覆宋本▽

① 古列女傳七卷、續列女傳一卷、攷證一卷

漢・劉向撰（續傳は撰者闕名）

清・顧廣圻攷證

乾隆六十年（一七九五）元和顧氏小讀書堆據宋建安余氏勤有堂本重刊。

②新刊古列女傳七卷、續列女傳一卷（挿圖本）

漢・劉向撰（續傳は撰者闕名）

晉・顧凱之畫

道光五年（一八二五）揚州阮氏據宋建安余氏刊本重刻（文選樓叢書、叢書集成初編及び簡編所收）

右の二書はともに宋建安余氏の刊本に據って重刻したもので、體裁は、繪圖の有無（このことについては後に詳述する）の他は同じである。今、二書の體裁の要點を次に箇條書きしておく。

一、古列女傳七卷は、第一卷母儀傳、第二卷賢明傳、第三卷仁智傳、第四卷貞順傳、第五卷節義傳、第六卷辯通傳、第七卷孽嬖傳の七門に分類され、各卷十五傳、ただし母儀は一傳を闕くので都合一〇四傳である。續列女傳一卷は、周郊婦人より梁夫人嬖に至る二〇傳で、すべて後人の増益したものであり、それぞれ母儀より孽嬖に至る七門の一に當て嵌めている。

一、北宋・曾鞏の「古列女傳目錄序」及び北宋・王同の「古列女傳序」がある。

一、第一卷から第七卷までの卷名の後、各人傳目次の前にはそれぞれ四言十句の韻文から成る頌義小序が置かれている（ただ第七卷は六句のみで下四句を闕く）。第八卷には頌義小序がない。

一、目錄の最後に崇文總目序の文を引き、その後に「謹案……」で始まる識語があり、「嘉定七年甲戌（一二二四）十二月初五日武夷蔡驥孔良拜手謹書」の日付と署名がある。蔡驥なる人物は傳未詳。

列女傳の刊本及び頌圖について

一、第一卷から第七卷までの本文、各人傳の後にはそれぞれ四言八句の韻文から成る頌がある。第八卷には頌がない。
一、②の刊本の繪圖は各人傳本文の上方に、兩葉に跨って配置されている。以上の諸點である。

③列女傳補注八卷、校正一卷、敍錄一卷

清・王照圓補注・敍錄

清・臧庸校正

郝氏遺書本（龍谿精舍叢書史部、舊小說已集、臺灣商務印書館人文庫等所收）

「嘉慶十六年（一八一）秋七月戊子日」の日付の臧庸の序と、「嘉慶十有七年三月望日」の日付の馬瑞辰の序がある。
王照圓は爾雅義疏などを著した郝懿行の妻室で、補注には夫の意見も参考したらしく、注中に「夫子曰」の文も見える。
楊鍾羲は、「釋名理、校正文字、貫患經傳、疏解精嚴。」と評し、張敬は、「王氏之詁議無不精審、又復廣證羣書、兼綜衆說、以是考譌正謬、訂異參同、博識之至。」と評している。⁴⁾

④列女傳校注八卷（第八卷は續列女傳）

清・梁端校注

道光十七年（一八三七）錢唐汪氏振綺堂刊、同治十三年（一八七四）補刊本（福壽寶藏一百四十種啓迪類、上海中華書局四部備要所收）

「道光癸巳（一八三三）立秋日」の日付の汪遠孫の識語がある。汪遠孫は梁端の夫室である。張敬は、「搜羅參考、用力極勤、引注古籍有數十種之多、如史記・前後漢書・左傳・國語・尚書・三家詩・諸子・楚辭・禮記・大戴禮・太平御

覽・藝文類聚・文選等書以及當時樸學大家之訓詁校勘、靡不採擷。」と述べている。⁽³⁾

△明刊本▽

⑤ 劉向古列女傳七卷、續列女傳一卷（挿圖本）

漢・劉向撰（續傳は撰者闕名、繪圖は畫人不詳）

長沙葉氏觀古堂藏明刊本（上海商務印書館四部叢刊史部所收）

右⑤の刊本と同系統と思われるものに、次の和刻本がある。

⑥ 古列女傳八卷、新續列女傳三卷（挿圖本）

漢・劉向撰（繪圖は畫人不詳）

明・胡文煥校

明・黃嘉育增輯

承應二年癸巳（一六五三）八月穀旦室町通鯉山町小嶋彌左衛門板行（新續傳は承應三年刊）

新刻古列女傳敘があり、敘の末尾に「萬曆丙午（一六〇六）孟春日新都黃嘉育懷英父誤」とあり、明・黃嘉育の刊本を小嶋彌左衛門が翻刻刊行したものである。

古列女傳卷之八は續列女傳だが、漢・劉向撰と題している。また、新續列女傳三卷は、閨範圖集（明・黃希周詹商山州來氏諸子所輯也凡六卷——黃嘉育注文、以下同じ——）、古今列女傳（明・永樂皇帝命儒臣所編次也凡三卷）、音釋列女傳（福唐・陳伯全所收錄也凡三卷）、三綱行實（明・宣德辛亥（一四三一）朝鮮臣僉僉所編也凡三卷）、增補列女傳（明・鹿門茅坤所編也凡八卷）の諸書から都合七十傳を採って時代順に配列したものである。繪圖は⑤の刊本と全く同一のものである。

列女傳の刊本及び頌圖について

次に、明刊本で、頌の後に更に贊を加えたものがある。

⑦劉向古列女傳八卷（卷八は續列女傳）

明・黃魯曾贊

明・朱景固校正

嘉靖三十一年（一五五二）刊（崇文書局彙刻書所收）

黃魯曾の劉向古賢列女傳序があり、序末に「嘉靖三十一年八月朔序」とあり、この年の刊行と推定される。各人傳の後に頌が付けられているのは他の刊本と同様であるが、この刊本は、頌の後に更に贊が加えられている（卷八續傳には無い）。贊の形式は頌と同じく四言八句の韻文から成る。繪圖は無い。

以上⑤・⑥・⑦の三種の明刊本を、①・②の覆宋本と比較してみると、本文の文字の異同の外に體裁において多少の相違点がある。

一、序文の順序が異なる。王同「古列女傳序」が前にあり、曾鞏「古列女傳序」がその後⑥に置かれている。

一、頌義小序七章をまとめて目錄の前に置く。

一、母儀より嬖嬖、續傳に至る各卷の卷名・順序は同一であるが、各卷中の各人傳の配列の順序が、第一卷・第二卷・

第四卷・第六卷・第八卷の一部分において相違する。

一、また、傳名の文字・呼稱に若干の相違がある。

一、挿圖本について、繪圖の配置は、覆宋本②が各人傳の上方、兩葉に渡るのに對し、明刊本⑤・⑥は各人傳の前に置かれ、葉全面に畫かれている。以上の諸點である。ただ、覆宋本も明刊本ともに蔡驥の識語を載せており、南宋・

蔡驥刻本に本づいていると思われる。

明代には、劉向の古列女傳を基として、それ以後の婦人の傳記を増補したものが多く作られた。前掲⑥の刊本もその一種であり、またこの新續列女傳に採撫されている古今列女傳、増補列女傳もそうである。

⑧古今列女傳三卷

明・解縉等撰

永樂元年（一四〇三）内府刊本

解縉らが成祖の勅を奉じて撰した。成祖御製序があり、序末に「永樂元年九月朔旦」の日付けがある。上巻は后妃傳、中巻は諸侯大夫妻傳、下巻は士庶人妻傳、漢以前は劉向古列女傳に據り、以後は各史列女傳を略取し、更に明初の人を附益した。^⑦

⑨増補全像評林古今列女傳八卷（挿圖本）

明・茅坤補

明・彭烺評

明・宗原校

萬曆辛卯歲（一五九二）秋月余文臺重梓

對溪書坊の唐富春刊本を文臺書林の余象斗が重梓したものである。

前半、第四卷まではすべて劉向古列女傳より採録したもので、都合四十六傳を母儀より辯通に至る六門に分類している（嬖孽傳は採っていない）。後半、第五卷から第八卷まで都合五十傳は、再び母儀より辯通に至る六門に分ち、劉向古

列女傳の刊本及び頌圖について

列女傳より十五傳、續列女傳より八傳を採録し、残り三十六傳が茅坤の補である。

各人傳の前に兩葉に跨る繪圖を配し、繪圖の上方に四字一句の、左右には二十字または二十二字（卷頭有虞二妃圖は二十八字の例外）から成る贊がある。畫人の名は著していない。後出⑩の繪圖、仇英の流麗には及ばないが、物語をよく捉えた圖柄がおもしろく、古雅、掬すべきものがある。

續列女傳より採った八傳及び増補の三十六傳にも、劉向古列女傳に倣って同形式の頌を附している。

⑩繪圖列女傳十六卷

明・汪氏增輯

明・仇英繪圖

乾隆四十四年（一七七九）知不足齋藏版

鮑廷博（知不足齋）は増輯者の名を闕いているが、清・汪庚の「汪氏輯列女傳序」では、書中に太函を稱引しているところから、明・歙の人、汪道昆の撰としている（太函は道昆の號、また太函集一百二十卷の集名）。また續修四庫全書提要は、書中の紀年が萬曆癸酉（一五七三）に止んでいるところから、萬曆中、癸酉以後の刻刊であろうと推定している。

門目を分たず、時代順に三百十二傳を列するが、漢以前は劉向古列女傳に本づき、ただ嬖嬖傳を刪去している。また頌も刪去し、代りに、「汪曰」の形式で論評を加えている（ただし全傳にわたっているわけではない）。

全傳について、明・仇英の描くところの繪圖が、各人傳の前に兩葉に跨って配置されている。仇英は、「人物鳥獸山水樓臺の類を畫くを善くし、秀雅鮮麗なり。尤も士女を巧にし、神采生動、明時工筆の傑たり」と評された人で、この書の繪圖も衣紋の曲線が極めて美しい。

(二) 歷代著錄資料について

漢書劉向傳及び歷代目錄類の主なるものを舉げると次の通りである。

⑪ 漢書卷三十六楚元王傳、劉向傳

向睹俗彌奢淫、而趙衛之屬起微賤、踰禮制。向以爲王教由內及外、自近者始。故採取詩書所載賢妃貞婦、興國顯家可法則、及嬖嬖亂亡者、序次爲列女傳、凡八篇、以戒天子。

⑫ 漢書卷三十藝文志、諸子略、儒家

劉向所序六十七篇。△注▽新序說苑世說列女傳頌圖也。

⑬ 隋書卷三十三經籍志、史部、雜傳解說

漢時、阮倉作列仙圖、劉向典校經籍、始作列仙列士列女之傳。

⑭ 隋書經籍志、史部、雜傳

列女傳十五卷、劉向撰、曹大家注

⑮ 舊唐書卷四十六經籍志、史部、雜傳

列女傳二卷、劉向撰

⑯ 新唐書卷五十八藝文志、史錄、雜傳記類

劉向列女傳十五卷、曹大家注

⑰ 崇文總目卷二傳記類上

列女傳の刊本及び頌圖について

列女傳十五卷、曹大家注

⑱郡齋讀書志卷九

古列女傳八卷、續列女傳一卷、漢劉向撰

⑲直齋書錄解題卷七

古列女傳九卷、⁹⁾漢護都水使者光祿大夫劉向子政撰

⑳文獻通考

古列女傳八卷、續列女傳一卷

㉑宋史卷二百三藝文志、史類、傳記類

劉向古列女傳九卷

㉒四庫全書總目提要十二、史部、傳記類一

古列女傳七卷、續列女傳一卷、漢劉向撰

なお、明史藝文志は明一代二百七十年間の各家の著述を録するもので、當時の現存書目録ではなく、これに代るものに焦竑の國史經籍史があるが、これは明志の序に、「明萬曆中、修撰焦竑修國史、輯經籍志、號稱詳博。然延閣廣內之藏、竑亦無從徧覽、則前代陳編、何憑記錄、區區掇拾遺聞、冀以上承隋志、而賡書錯列、徒滋譌舛」と非難されている書である。従つてこの書に列女傳十五卷劉向撰曹大家注を載せているのは到底、信用できず、明らかに隋志より轉載したものにすぎない。

(三) 劉向舊書と曹大家注本について

漢書劉向傳(資料⑩)に據ると、列女傳の劉向編輯に係る舊書は「凡八篇」である。また、漢志(資料⑫)の班固自注に「列女傳頌圖」とあるから、本傳の他に頌と繪圖とが存在していたのであるが、この兩者の關係はどうであったかという、清・汪遠孫はこれについて列女傳校注(刊本④)所掲の識語の中で、次のように推定している。

劉向列女傳、有頌有圖。據漢書藝文志、當是九篇。傳七篇、頌一篇、圖一篇。本傳言八篇者、圖不數也。

「凡八篇」の内容は、母儀より孽嬖に至る七篇の本傳と頌一篇とで、今本列女傳はすべて頌を各人傳の後に各箇に配置した體裁になっているのに対し、劉向舊書の體裁は、頌は各人傳とは別にまとめて一篇となっていたのである。覆宋本の新刊古列女傳(刊本②)の蔡驥識語の前に引く崇文總目にも、「按向作列女傳八篇、一曰母儀、二曰賢明、三曰仁智、四曰貞順、五曰節義、六曰辯通、七曰孽嬖、八曰傳頌」とあり、このことはまず間違いない。

そして、汪遠孫の云う如く、八篇の中に圖は数えないということであれば、繪圖は本傳や頌とは別に行われていたということになる。その根據を汪遠孫は示していないが、これを補足するのに次の資料を挙げることができよう。

②③ 七略別錄

臣向與黃門侍郎歆所校列女傳、種類相從爲七篇、以著福禍榮辱之效、是非得失之分、畫之屏風四堵。

右は亡佚した列女傳敍録の一部と思われる。種類相從いて七篇と爲す、というのは母儀より孽嬖に至る七門の分類が、劉向舊書の當初からの體裁であったことを示す。そして繪圖については、これを屏風四堵に畫くと云い、文章に著わすばかりではなく、視覺にも訴えて勸戒としたのである。

この舊書の體裁は後漢のころに改められたらしく、隋志(資料⑭)では曹大家注十五卷となっている。崇文總目(資料

列女傳の刊本及び頌圖について

㊦も同じく曹大家注十五卷を載せており、この十五卷本は宋初まで通行していたらしい。

ただ十五卷の内容は、後にこの十五卷本を整理編定した北宋・王回はその古列女傳序の中で、世に行われている班氏注向書は、七篇の各篇を上下に分け頌と并せて十五卷にしたものであると云っているから（後出資料㊦）、母儀より嬖嬖に至る七門の分類においては變りなかった。しかし、各篇の中には劉向舊書には元來、無かった傳、つまり劉向以後に他人の手によって増附された部分も含まれていて、向が書の本然に非ずと王回は指摘している。

漢代は、言うまでもなく儒教社會の成立した時期であるが、後漢の時代は前漢に比してはるかに禮教に嚴格で、婦女に對する禮節の要求も一段と厳しく、後宮や顯門貴族の婦女の教育において、列女傳はこの要求を満たして恰好の教科書であった。後漢書皇后紀に、大將軍梁商の女、後の順帝梁皇后は、「常に列女圖畫を以て左右に置き、以て自ら監戒」としたという逸話が見えるが、この事情をよく物語っている。後宮の女師ともいうべき立場にあった曹大家が列女傳の注を作ったのもよく諒解できるのである。

隋書經籍志には、列女傳八卷高氏撰、列女傳六卷皇甫謐撰などを載せ、劉向列女傳に倣って、おそらく劉向以後の婦人傳を主とする女訓の書が、後漢から魏晉にかけて數多く作られたことが推測できるのであるが、曹大家注十五卷本に劉向以後の婦人傳が増附されていくのは、これら諸列女傳との混肴によって起る當然の過程と言えるであらう。

隋書經籍志には、注釋書として曹大家注十五卷の他に、列女傳七卷趙母注があり、これに據ると、各篇を上下に分かたない七卷本も行なわれていたことが推測できる。この推測が正しいとすれば、その内容は母儀傳より嬖嬖傳に至る七卷で、頌一卷は含んでいないことになる。これは後述する如く、魏晉の頃に、頌は劉向の子、劉歆の作であるという訛傳を生じ、王回の見た曹大家注十五卷本も、卷十五の頌は劉歆撰と題していたという（古列女傳序、後出資料㊦）。このよ

うな事情から頌一卷は、劉向の本傳七卷とは切り離して別に行われていたものと思われる。隋志に、列女傳頌一卷劉歆撰（ただし今本列女傳の頌とは異なる——後述）、列女傳頌一卷曹植撰、列女傳讚繆襲撰があり、これは本來、諸列女傳の中のもの。ずれの頌・贊なのか全く分からないが、とにかく頌や贊が本傳とは別に行われていたことの証左になるであろう。

また隋志には、列女傳七卷蔡母遂撰があり、これは撰となつてはいるが、南朝宋・裴駰の史記集解に引かれている佚文二條を見ると明らかに注であるから、これも趙母注と同じく七卷本劉向列女傳の注釋書なのであろう。なお、舊唐書經籍志には曹大家注及び趙母注は見えず、列女傳七卷蔡母遂撰のみを載せ、新唐書藝文志では三書すべてを載せているが、曹大家注本の記載形式が劉向列女傳十五卷〔自注〕曹大家注となつてゐるのに対して、他の二書は、蔡母遂列女傳七卷、趙母列女傳七卷となつていて、注釋書としての記載形式をとっていない。宋初にはおそらく、曾鞏のいわゆる録のみ有つて亡んだ書で（古列女傳目錄序、後出資料②）、歐陽脩も實際にはこれらを見てはいないであろう。これら二書は崇文總目には無い。

なお、馬融も列女傳の注を作つたことが後漢書馬融傳に見える。馬融は曹大家と同郡の出身で、當時、漢書が世に出て間もないころだったので通達している者が少なく、曹大家の閣下に伏して漢書の讀みを受けた。後、馬融の兄、馬續は曹大家を繼いで漢書を完成させた。また、曹大家が女誡七篇を書き上げると、馬融は大層、感心して妻や娘に讀み習わせたという。後漢書列女傳（曹世叔妻傳）には右のようなエピソードを載せ、二人の間柄の師弟關係にも似た親交の程が窺える。あるいは二人のこのような關係や關心が、同じく列女傳の注を作らせることになったのかも知れない。

（四）曾鞏編定本について

列女傳の刊本及び頌圖について

舊唐書經籍志には曹大家注十五卷本が無く、列女傳二卷劉向撰が見える（資料⑮）。しかし、これは卷數及び排列の順序から見て、隋書經籍志に見える列女傳二卷劉向撰の誤りであることは明らかで、新唐書藝文志はこれを正している。そうすると舊唐志には劉向列女傳を闕くことになるが、歐陽脩は新唐志でこの遺漏を補い、劉向列女傳十五卷曹大家注を載せている（資料⑯）。

歐陽脩門下の曾鞏は、嘉祐二年（一〇五七）、進士に及第し、召されて編校史館書籍の任に當った（宋史卷三一九）。この時、秘閣書籍の整理に携わり、主として史書の目録序を多く書いたが、その中、列女傳の編定の事情を次のように述べている。

②④古列女傳目錄序

劉向所敍列女傳、凡八篇。事具漢書向列傳。而隋書及崇文總目、皆稱向列女傳十五篇曹大家注。以頌義攷之、蓋大家所注、離其七篇爲十四、與頌義凡十五篇。而益以陳嬰母及東漢以來凡十六事。非向書本然也。蓋向舊書之亡久矣。嘉祐中、集賢校理蘇頌始以頌義篇次、復定其書爲八篇、與十五篇並藏於館閣。而隋書以頌義爲劉歆作、與向列傳不合。今驗頌義之文、蓋向之自敍。又藝文志有向列女傳頌圖、明非歆作也。自唐之亂、古書之在者少矣。而唐志錄列女傳凡十六家、至大家注十五篇者、亦無錄。然其書今在。則古或有錄而亡、或無錄而在者、亦衆矣。非可惜哉。今校讎其八篇及十五編者已定。可繕寫。（以下略）

編校館閣書籍臣曾鞏序

前項②で述べた曹大家注、馬融注、趙母注、蔡母遂注の、後漢から魏晉にかけての時期に作られた諸注諸本のうち、曾鞏の時に存していたのは曹大家注十五卷本のみであった。しかし、曹大家注本には後人の増附した部分もあって劉向書の本然を失っていたので、これを校訂して舊書の體裁に編定しようとしたのである。

ただ、曾鞏自身がこの編定作業に實際どれほど關與したのか詳かでない。ほぼ同じ時期ではあるが（嘉祐中）、曾鞏より以前に、集賢校理蘇頌が頌一篇の順次によって本傳を八篇に編定し直したのが始めである。いずれにしてもこの二人の作業は個人的な仕事ではなく、館閣書籍の編校という朝廷事業の一環であったのだろう。右の目録序には「編校館閣書籍臣曾鞏」と署しているし、編定後の八篇本が曹大家注十五卷本と並んで館閣に藏されたという事實もこの推測を裏付ける。

これに對して王同は、嘉祐末年、不遇退居中に個人的な關心からこのテキストを更に肌理細かく編定した。

宋元學案によると、王同は曾鞏と同じく歐陽脩門下で、共に文學を以て名があった（卷四、王梓材攷）。王同の文集、王深父文集に曾鞏は序を寄せ、「王深父は吾が友である」と書き出して、二人の親交の深さを窺わせる。

次に掲げる王同古列女傳序には、官職の肩書きが無く、序末の日付けは嘉祐八年（一〇六三）九月二十八日で、宋史儒林傳（卷四三三王同傳）及び王深父文集序によるとその頃、王同は官を辭して潁州に退居している不遇の時期であった。退居の事情は詳かでないが、進士に中第して衛眞縣の知事となり、しかし合わないところがあつて病を稱して自ら免ぜられたと云う。しかし朝廷には推薦者が多く、やがて南頓縣の知事を拝したが、辭令が届いた時には不幸にも卒していた。治平二年（一〇六五）七月二十八日、年四十有三の夭逝であつた。

右のような事情から判斷すると、列女傳の編定は館閣書籍編校の一環として、蘇頌・曾鞏によって一應の整理を終つた後、曾鞏との個人的な繋がりからか、王同がこれを完成したものと想われ、實質的には王同編定本と稱すべきであらう。しかし、後の人、南宋・蔡驥はこの時に編定したテキストを曾校書と呼んでいるので（後出資料⑥）、これに従つてここではこのテキストを曾鞏編定本と呼ぶことにする。

列女傳の刊本及び頌圖について

さて、このような推測のもとに王同の序を讀むと、曾鞏序に比べてより一層、編定作業の詳細が窺えるのである。

25 古列女傳序

古列女傳八篇、劉向所序也。向爲漢成帝光祿大夫、當趙后姊姊嬖寵時、奏此書、以諷宮中。其文美刺詩書已來女德善惡、繫於家國治亂之效者。故有母儀、賢明、仁智、貞慎、節義、辯通、嬖嬖等篇。而各頌其義、圖其狀、總爲卒篇。傳如太史公記、頌如詩之四言、而圖爲屏風云。然世所行班氏注向書、乃分傳每篇上下、并頌爲十五卷。其十二傳無頌、三傳其同時人、五傳其後人、而通題曰向撰、題其頌曰向子歆譔。與漢史不合。故崇文總目以陳嬰母等十六傳爲後人所附。予以頌攷之、每篇皆十五傳耳。則凡無頌者、宜皆非向所奏書。不特自陳嬰母爲斷也。頌有齊倉公女等、亦漢時人、而秦已上女史見於他書、而此顧不錄者猶衆。亦不特周郊婦等四人而已。頌之、畫之屏風、而史有頌圖在八篇中。今直祕閣呂縉叔、集賢校理蘇子容、象山令林次中、各言嘗見母儀賢明四卷於江南人家、其畫爲古佩服、而各題其頌像側。然崇文及三君、北游諸藏書家、皆無此本。不知、其傳果向之頌圖歟、抑後好事者、據其頌取古佩服而圖之歟。莫得而攷已。余讀向書、每愛其文、嘉其志、而惜其所序散亡脫繆於千歲之間、幸存而完者此一書耳。復爲他手竄疑於其眞。故并錄其目、而以頌證之、刪爲八篇、號古列女傳。蓋凡以列女名書者、皆祖之劉氏故云。餘二十傳、其文亦奧雅可喜、非魏晉諸史所能作也。故又自周郊婦至東漢梁嫺等、以時次之、別爲一篇、號續列女傳。

(以下略)

嘉祐八年九月二十八日長樂王同序并撰

曹大家注本には後人の増附した陳嬰母以下十六傳が含まれていることは崇文總目がとくに指摘していたところであるが、王同は更に頌義の無いものはすべて劉向舊書ではないとし、都合二十傳を刪去した。

こうして劉向の舊に復原した古列女傳は、每篇十五傳で今本とほぼ同じであるが、ただ頌は各人傳とは分れて別にま

とめられており、本傳七篇、頌一篇、合せて八篇である。また刪去した二十傳は別に續列女傳一篇として附したから、結局、曾鞏編定本は都合、九篇であつた。第(二)項に掲げた歷代書目のうち、郡齋讀書志(資料⑧)、直齋書錄解題(資料⑨)、文獻通攷(資料⑩)、宋史藝文志(資料⑪)の各目録は、皆この九篇本を著録している。

元・馬端臨の文獻通攷經籍攷は、ほとんど郡齋讀書志と直齋書錄解題とを基にして著作されたものである。そして文獻通攷の歷代制度史の記録は南宋嘉定末年(一二三四)までで終っているから、曾鞏編定時の嘉祐八年以降、少なくともこの嘉定年間までは曾鞏編定九篇本が通行していたことが分る。一方、曹大家注十五卷本は、嘉祐以後も曾鞏編定本と並んで館閣に藏されていたが(資料⑫)、崇文總目を最後として目録から姿を消し、郡齋讀書志には見えず、この間に曾鞏編定本の流行につれて亡んだらしい。

(五) 蔡驥刻本について

南宋嘉定七年(一二三四)に武夷の人、蔡驥が列女傳を刻刊した。その識語に次のように云う。

⑫ 蔡驥識語

謹按、列女傳頌義大序小序及頌、或者皆以爲劉向子劉歆作。驥謹按、隋書崇文總目及本朝曾校書序、則非歆作明矣。然崇文總目、則以續二十傳無頌、附入向七篇中、分上下爲一十四篇、并傳頌一篇、共成一十五篇。今人則以向所撰列女傳七篇、并續列女傳二十傳爲一篇、共計八篇。今止依此。將頌義大序列於目錄前、小序七篇散見目錄中間、頌見各人傳後。觀者宜詳察焉。嘉定七年甲戌十二月初五日、武夷蔡驥孔良拜手謹書。

右の文の中で、曹大家注十五卷本については崇文總目に據つて説明しているから、蔡驥の時にはすでに實際には見る

列女傳の刊本及び頌圖について

ことができなかったらしい。従つてその刻刊には曾鞏編定本に依らざるを得ないのであるが、蔡驥はこの時、少しく體裁を變えた。

曾鞏編定本は、頌はまとめて一篇となつていたことは先に述べた。そして、その頌一篇の内容は、右の蔡驥識語から判斷すると、頌義大序一章、頌義小序七章、頌一百五章の構成であつたらしい。蔡驥はこの頌一篇を分割分散して目錄や本傳七篇の中に組み込んだ。即ち、頌義大序一章は目錄の前に置き、頌義小序七章は各篇各人傳目錄の前にそれぞれ配置し、頌一百五章は本傳各人傳の後に配置したのである。

この結果、蔡驥刻本は、曾鞏編定九篇本（古列女傳七編、頌一篇、續列女傳一篇）に對し、古列女傳七篇、續列女傳一篇、合せて八篇となつた。この體裁は今本の覆宋本（刊本①②）とほとんど同じである。ただ、明刊本（刊本⑤⑥⑦）は頌義小序七章がひとまとまりで目錄の前に置かれていたところ、蔡驥刻本とわずかに異なる。なお今本はすべて頌義大序一章を佚去している。

（六）頌及び頌の作者について

——附・續列女傳の作者について——

頌とは、文體明辯・頌によると、「詩經の六義の第六が頌である。頌の義は容で、盛徳の形容を美みし、その成功を神明に告げるものである。たとえば商頌那篇や周頌清廟之什の諸篇はみな神に告げる詩で、これが頌の正體である。これに對し魯頌駉篇、閟宮篇などは僖公を頌する詩で、これは頌の變體である。後世作るところの頌はすべて變體である。頌の詞は散文を用いたり、韻語を用いたりする」と説明される。

列女傳における頌については、王回も、頌は詩の四言の如しと述べているように（資料②）、詩經の頌を倣ったもので、文體明辯の説明を籍りれば、それは頌の變體であり、各傳における婦人の人柄や事績を美みし、四言八句の韻文にまとめた賛え歌である（ただし、壁嬖傳の頌は譏り歌とも言ふべきか）。

さて、この頌曰で始まる一百五章の韻文が、今本のように各人傳後に分散して按配されたのは蔡驥刻本以後で、それ以前は一篇の別卷としてまとめられていた。

いま各人傳の一傳ごとの構成を見ると、非常に形式が整っている。傳は太史公の記の如しと評せられているように（王回序、資料②）「某々なる者は某々の女（あるいは母、夫人等）なり」の形式で書き出し、一傳の終りには太史公曰に相當する君子曰、君子謂形式の論評があり、更に詩經の詩句を引用し、「此之謂也」で結ぶ。この君子曰形式の論評は、すでに左傳に見えるもので、詩經の詩句を引用して論斷の根據とするところも左傳と同じである。つまり、列女傳の各人傳の構成は史記の列傳に倣い、結びの論評は左傳に倣っているといえる。なお、この左傳の君子曰や史記の太史公曰形式は、唐・劉知幾も指摘するとおり、後世史書における論贊の先驅形式である（史通卷四論贊）。

君子曰形式が史記の太史公曰や漢書の贊曰に相當するとすれば、頌曰形式は史記の太史公自序や漢書の敘傳に相當するであろう。司馬遷は自序の後半で史記諸篇の編纂意圖を列舉しているが、班固はこれを變えて四言詩の體裁にし、これを述と呼んだ。列女傳の頌曰は體裁上、敘傳の述に近く、あるいは敘傳の先驅形體かも知れない。なお後漢書を作った范曄はこれを贊といい、内容・體裁ともに敘傳の述と同じなのに、これをそれぞれ本傳篇末に附す形式にした結果、すでに本傳には論があつて一篇が結ばれている上に、更に贊が重複するということになってしまい、劉知幾にこれを「蕭李の南北史、^⑨大唐新修の晉史、皆、范書の誤りに依り、本篇の終りに贊有り。夫れ卷ごとに論を立つるすら其

列女傳の刊本及び頌圖について

の煩すでに多なるに、論に嗣ぐに贊を以てし、頌いよいよ甚し。また猶ほ文士の、碑を製るに序終りて續ぐに銘に曰くを以てし、釋氏の、法を演ぶるに義盡きて宜ぶるに偈に言ふを以てするがごとし。苟しくも史を撰するに斯くの若くんば、與にかの簡要を議するに難き者なり」と非難されている。列女傳の頌曰を各人傳末に分散配置した蔡驥も、もし劉知幾に出遇つていれば同じ譏りを受けたことであらう。

右のごとく、各人傳は君子曰、君子謂で一傳の結びの體裁が整っているのであるから、今本の如く、更に頌曰形式の結びは屋上、屋を架すの類で、元來、必要がない。従つて劉向の舊における頌曰は、本來、一傳の構成とは別の目的で作成され、別卷としてまとめられていたのである。

別の目的とは誦讀のためであらう。列女傳の制作目的は後宮の婦道確立と教化にあった(資料⑩)。當初から後宮婦人の教育を念頭に置いて作られたものである。⁽²⁰⁾後漢に入つて後宮女師の立場にあつた曹大家が注を作ったことや、また魏晉から宋明にかけて劉向列女傳を做つた夥しい數の諸列女傳、女訓の書が作られたことから見ると、劉向列女傳は後宮婦人教育の教科書として使用されたものであることを推測させる。ここに教育の實際上の效果に資するため、四言八句の韻文形式の頌を別に作り、暗誦に便ならしめたのであらう。字義の上からも説文段注には、「頌之爲言、誦也、容也」とあり、孟子集注には、「頌誦、通」⁽²¹⁾とある。すなわち頌曰の頌は、形式においては詩經の頌の變體であると同時に、目的においては誦讀の意義を有するのである。

このように見ると、劉向の列女傳制作にかけた意氣込みは餘の著作に對するものとは全く異つていた。史記に倣つて傳を述べるだけに止まらず、詩の四言を籍りてこれを誦讀せしめ、更にはこれを屏風四堵に畫く(資料⑫)と云う如く、視覺にまでも訴えて鑑戒にしようという、並々ならぬものがあつたことを窺い知るのである。

なお、今、北京故宮博物院所藏の晉・顧凱之列女傳圖には、一段の場面が終ると必ず頌が題されている。あるいは漢時の屏風畫にも頌が題されていたのかも知れない。

以上の如く、頌は本傳七篇とは離れて獨立した一篇を構成していたのであるが、このことから頌一篇は劉歆の作であるという訛傳を生じた。すなわち隋書經籍志は、劉向撰列女傳十五卷（資料⑭）の他に、次の一卷を著録している。

列女傳頌一卷、劉歆撰

これについて、王回序に「漢史と合はず」と云い（資料⑮）、曾鞏序にも「隋書は頌義を以て劉歆の作と爲す、向の列傳と合はず。今、頌義の文を驗するに、蓋し向の自ら敍するなり。又、藝文志に向の列女傳頌圖有り、明らかに歆の作に非ざるなり」といつて隋志を斥けている（資料⑯）。

ただ、晁公武は隋志を信用して次のように述べている。

⑳郡齋讀書志卷九

公武按、隋經籍志有劉向列女傳十五卷、又有劉歆列女傳頌、又有項原列女後傳。今回刪此書爲八篇、以合漢史得之矣。至於疑頌非歆作。蓋因顏籀之言爾、則未必然也。二十傳豈項原所作耶。

晁公武は、王回が唐・顏籀（字は師古）注の方に依據して隋志の「列女傳頌一卷、劉歆撰」を疑うのは誤りであると云うが、これは晁公武の誤解である。晁公武が指して顏籀注というところの漢書藝文志の劉向所序六十七篇の下注、「新序說苑世說列女傳頌圖也」（資料⑰）の文は師古曰がなく、明らかに班固の自注であるから、王回が隋志を棄てて漢志に従うのは當然のこと、晁公武の非難は當らない。四庫提要は、頌が劉歆作と誤り傳えられるようになったのは顏氏家訓からであると次のようにいう。

列女傳の刊本及び頌圖について

四庫全書總目提要十二、史部雜傳、古列女傳の項

考顏氏家訓、稱列女傳劉向所造、其子歆又作頌⁽²³⁾。是譌傳頌爲歆作、始於六朝。脩隋志時、去之推僅四五十年、襲其誤耳。豈可遽以駁漢書乎。

ここで隋志は家訓の誤りを襲ったと断定しているが、しかし、劉向の頌とは全く別の列女傳頌を劉歆が作ったという可能性はある。というのは隋志には列女傳頌一卷劉歆撰の他に、列女傳頌一卷曹植撰、列女傳讚一卷繆襲撰を載せており、先人の作った列女傳（必ずしも劉向列女傳とは限らない）に對して頌や贊を作ることとはあり得る。實際に、劉向古列女傳の頌の後に自作の贊を附している刊本が存在する（刊本⑦）。清・姚振宗は隋志の劉歆撰と著錄された列女傳頌について次のように述べている。

漢書藝文志拾補卷二諸子略

按漢志注云列女傳頌圖、是頌亦劉向撰。隋志別出劉歆頌一卷。與日本國書目所載同。⁽²⁴⁾文選思立賦注引劉歆列女傳頌曰、材女修身、廣觀善惡。今本無此文、知別爲一書、已久亡矣。

隋志劉歆列女傳頌一卷は、劉向列女傳頌とは全く別の一書であるとしている。しかし、もしこの指摘が正しいとするならば、同じ隋志の曹大家注十五卷本を實際に見てこれを編定し直した王回の報告によると、本傳には通じ題して劉向撰と曰い、その頌に題して劉歆撰と曰うと云っているから（資料⑤）、兩者の間に混亂が起る。つまり劉向撰列女傳の頌一卷は劉歆撰で、更に劉歆はその他に別の列女傳頌一卷を作ったという、到底、考えられないような結論に達してしまっているのである。

結局、隋志の列女傳頌一卷劉歆撰とは、四庫提要の言うように顏氏家訓の誤りを襲ったものなのか、それとも姚振宗

の指摘するとおり劉向列女傳の頌とは全く別の一書なのか、この點については未だ詳かではないが、劉向列女傳は本傳も頌も共に劉向の撰であることは斷定してよいであろう。

(附) 續列女傳の作者について

續列女傳一卷は、王同が曹大家注十五卷の中から頌の無い二十傳を後人の増附と考え、しかし、「その文また典雅、喜ぶべく、時を以てこれを次し、別に一篇と爲し」たものである(資料②)。従つてその撰者を詳かにするのは極めて困難であるが、晁公武は項原であろうと推定している(資料②)。その根據は隋志である。

隋書經籍志、史部、雜傳の中から列女傳の名を冠する書物を列擧すると次のとおりである。

列女傳十五卷、劉向撰、曹大家注

列女傳七卷、趙母注

列女傳八卷、高氏撰

列女傳頌一卷、劉歆撰

列女傳頌一卷、曹植撰

列女傳讀一卷、繆襲撰

列女後傳十卷、項原撰

列女傳六卷、皇甫謐撰

列女傳七卷、蔡母遂撰

列女傳の刊本及び頌圖について

列女傳要錄三卷

劉向撰の他に諸種の撰注がある中から、項原を續列女傳の撰人に擬する根據は、わずかに後の一字にあるだけで、晁公武も「豈に項原の作る所ならんか」という如く、推定の域を出ていない。四庫提要が今本列女傳について、「今前七卷及び頌は向が名を題し、續傳一卷は則ち撰人を署せず。その實を核すことを庶幾ふも疑はしき所は闕く」と述べるところに従うべきであろう。

(七) 圖について

——附・晉顧凱之列女傳圖について——

漢志に見える列女傳頌圖（資料⑫）のうち、圖は八篇の中に含まれてなく、七略別錄によると屏風四堵に畫かれていたという（資料⑬）。堵は牆壁で、四堵とは四方の壁面を指すのか壁間の廣さを指すのが、定かでないが、ともかく屏風や宮室の壁間に畫かれていたという。

いったい、漢代における宮殿や宗廟を飾る壁畫の畫題は、儒教的勸戒を目的とした人物圖が殊に多い。最も有名なのは宣帝の名臣圖である。宣帝甘露三年（前五二）、匈奴の單于が入朝したとき、上は股肱の功臣を表彰するため、麒麟閣に肖像畫を描き、官爵姓名を署した（漢書卷五四蘇武傳）。「圖畫其人於麒麟閣」とあるからおそらくこれは壁畫である。また蔡質は「尚書奏事於明光殿省中、皆以胡粉塗壁、紫青界之、畫古烈士、重行書贊」（漢官典職儀式選用）と、壁畫の手法も傳えている。

蔡質の文で注目すべきは、烈士圖には贊が書かれていたということである。後に述べる顧凱之列女傳圖は人物像の側

に頌が題されており、そしてこの願圖列女傳は、清・阮福によると漢時の屏風列女圖に本づく^(第4項参照)とされるから(第4項参照)、屏風・四堵の列女圖にもその當初から頌が書きつけられていたにちがいない。(六)頌の項で述べたように、頌の制作目的自體、畫贊のためという一側面を有していたとも考えられるのである。

ただ、列女傳は全部で一百五傳ある。顧凱之列女傳圖の殘卷は、わずか八傳、八段の場面しか残っていないが、その圖中の人物は合計二十八人を數える。單純に計算すれば、一百五傳では三百七十人ほどの人物圖が描かれる勘定になり、全部を描くのは少し無理かと思われるので、屏風・四堵に畫いたのはおそらくその主要場面ではないだろうか。とすれば一百五傳全圖は別に絹本として秘藏されていたことも考えられる。後漢書皇后紀顧烈梁皇后傳に、「常以列女圖畫置於左右、以自監戒。△李賢注△劉向撰列女傳八篇、圖畫其象」とあるが、この圖畫はあるいは絹本だったのかも知れない。²⁸

列女傳頌圖のうち、列女傳凡八篇^(資料①)、圖を數えないのは、劉向自身が繪筆を執ったわけではなく畫人に描かせたことにもよるのだろうが、一つには、絹本の卷數が多く、別本として制作されたことにもよるのである。顧凱之列女傳圖殘卷は仁智傳中の八傳、八段の繪圖で一卷となっており、次項(六)で述べる江南本列女傳圖の殘卷は母儀・賢明の二篇三十傳で四卷というから、これも單純に計算して、七篇一百五傳では十二乃至十四卷程度の量となる。今、日本國見在書目錄に列女傳圖十二卷が見え、この圖が、顧凱之の描いたものか否かは測りようもないが、十二という卷數から推して、列女傳全圖の完本が我が國に傳えられていたことが分る。

以上の如く、列女傳の文章は書寫されて普通に行われるが、繪圖は模寫が難しく、そのため屏風・四堵に描かれて後宮における勸戒の役割を果たしたのである。

列女傳の刊本及び頌圖について

さて、王同は劉向列女傳の體裁を説明して、「故に母儀、賢明、仁智、貞慎、⁽²⁹⁾節義、辯通、孽嬖等の篇有り。而して各々その義を頌し、その狀を圖し、總べて篇を卒ふると爲す」(資料②)という構成であつたと述べているが、これは勿論、曹大家注本や漢志の列女傳頌圖の語など諸々の資料からの推定で、實際にその繪圖を見たわけではない。また、上文に續いて「傳は太史公の記の如く、頌は詩の四言の如く、而して圖は屏風を爲すと云う」とも述べているが、傳と頌に關する感想は王同が實際に讀んで得た結果であるうが、圖に關しては傳聞かあるいは七略別錄などの資料に據つたものであるう。

ただ宋代においても、確かな證據は無いが、屏風に描かれた列女圖は存在していたこともあり得る。時代は遡るが唐・劉餗の隋唐嘉話中に唐・太宗の令、虞監が列女傳を寫して屏風の裝にしたとき、本を求めずともすべて暗誦して一字をも失わなかつたという逸話が見える。これは傳文を寫したもので繪圖には言及していないが、あるいは繪圖もあったのかも知れない。宋・鄭焦の通志圖譜略には顧凱之列女圖を載せているから、屏風はともかくとして列女圖の存在は疑いない。

(附) 晉・顧凱之列女傳圖について

なお、顧凱之列女圖は現在、北京故宮博物院に保存されており、一九五八年六期・文物參考資料の論文によると、それは仁智圖の一部分で、極めて精緻な模寫であり、顧凱之の藝術成就の程を知るに充分であるという。また、一九七八年に北京・中國國際書店發行の中國歷代繪畫・故宮博物院藏畫集Ⅰには、殘卷全圖を原寸大のカラー印刷によって收録しており、これによってほぼ殘卷の全容を窺うことができる。素絹本の墨畫で、八變——八段の場面があり、各變の末

尾に頰が書かれている。すべて仁智傳である。

圖の卷末に四つの跋文があり、そのうち汪注及び葉隆禮の跋文には次のように云う。

晉顧虎頭列女傳圖、元跋一十五變、四十九人、男二十四、女二十一、童子四。歷歲深遠、流落遺脫、僕偶得真蹟、僅存八變、男十五、女九、童子四、總二十八人。缺七變二十有一人。後於盛文肅公耳孫家、見蟬翼紙臨本、止一十四變、男女童子總四十四。亦少一變、缺五人。卷末有元友、方回、曾逢原、葉夢得跋。因求假摹寫、以補真蹟之缺處。且并錄四跋于后。寶慶改元（二二五）端月人日新安汪注宋卿識。

以續摹補真蹟之闕、徒使後人有紹不足之誚。乃徹去而重裝之。殘璜斷璧、夫豈以多爲貴哉。隆禮題。

顧凱之の列女傳圖は、宋代では仁智傳だけしか傳わっておらず、元友の頃には（傳不詳、曾逢原、葉夢得と同時代とみて、哲宗へ一〇八六）から高宗へ（一一六二）にかけての人か、それでも十五變すべて備わっていたが、汪注の時には僅か八變を存するのみで、それも汪注はたまたま顧凱之の眞蹟を手に入れたと稱しているけれども、先の文物參考資料の論文に云う通り、極めて精緻な模寫本であって、顧凱之原畫が存したわけではなかった。汪注は後に耳孫家所藏の、一變を缺くのみで比較的整っている蟬翼紙臨寫本を假りて、これを模寫して六變を増補した。後代、この圖卷を手に入れた好事家の葉隆禮（明末清初の人か）⁽³⁾は、模圖を續ぎ足して眞蹟の闕を補うのは、徒らに後世の人から、紹足らずして狗尾續ぐ、の譏りを招くことを恐れ、増補圖を刪去して裝丁し直した。これが、現在、北京故宮博物院に所藏されている模本顧凱之列女傳仁智圖である。

(八) 江南本列女傳圖の殘卷について

列女傳の刊本及び頌圖について

王同は古列女傳序に、「直秘閣呂紹叔、集賢校理蘇子容、象山令林次中、各言嘗見母儀賢明四卷於江南人家。其畫爲古佩服、而各題其頌像側」(資料⑤)という傳聞を記している。この江南本が劉向の舊を傳えた古寫本か否かについて、王同は上文に續けて、「然崇文及三君、北游諸藏書家、皆無此本。不知其傳果向之頌圖歟、抑後好事者、據其頌取古佩服而圖之歟、莫得而攷已」と述べ、非常に否定的ではあるが實際にはこれを見ていないので、得て攷うるなしと判斷を保留しているのであらう。

ただ、王同の傳聞を記した先の文章はやや曖昧で、この四卷の殘卷が、本傳があつてそれに頌圖が附されている、ちやうど今本の挿圖本のようなものなのか、それとも、本傳の文章はなかっただ頌を題した繪卷物のようなものなのか、明確ではない。もし、前者だとすれば、母儀・賢明二篇で四卷ということは、各篇を上下に分けた曹大家注十五卷本の系統で、しかし、頌は獨立した一篇ではなく、各人傳ごとにその人物像を畫いた繪圖があり、その側に頌が題されていた體裁であつたということになる。しかし、このような列女傳の挿圖本が北宋の頃に存在していたことを示す資料が他に無いので、これは後者の繪卷物の殘卷であらうと考えられる。現存する顧凱之列女傳圖の殘卷(故宮博物院藏)は、仁智傳十五傳の中の八傳の圖を傳えており、一卷の絹本となっている。母儀・賢明二篇三十傳ではちやうど四卷になる勘定である。また、清・錢曾はたまたま明内府藏の列女傳を入手したが、この書について次のように記している。

②⑧ 讀書敏求記卷二、傳記

古列女傳七卷、續列女傳一卷

今此本始於有虞二妃、至趙悼后、號古列女傳。周郊婦至東漢梁嫺等、以時次之、別爲一篇、號續列女傳。頌義大序、列于目錄前、小序七篇、散見目錄中、頌見各人傳後。而傳各有圖、卷首標題晉大司馬參軍顧愷之圖畫。蓋顏氏所云。

而蘇子容嘗見江南人家舊本、其畫爲古佩服、各題其頌像側者。與此恰相符合、定爲古本無疑。千載而下、覩此得存古人形容儀法、眞奇書也。牧翁亂後入燕、得于南城廢殿。卷末一條云、一本永樂二年七月二十五日、蘇叔敬買到。

當時採訪書籍、必貼進買人氏名、鄭重不苟如此。內府珍藏、流落人間、展轉得歸于予。不勝百六懸迴之感。

右の一書は、晉・顧凱之圖と題する挿圖本である。そしてこの挿圖本は北宋の江南本に由來すると斷定しているが、錢曾が江南本の實體を挿圖本と考えているのか、繪卷物と考えているのか、ここでも明確ではない。どうやら前者と見ているようであるが、それなら明らかに誤りで、本傳について見ると、古列女傳七卷、續列女傳一卷といい、頌義大序が目録の前に置かれ、小序七篇が目録中に散見し、頌は各人傳の後に見られるというのは、卷數においても體裁においても南宋・蔡驥刻本と全く一致する（資料⑤）。

讀書敏求記ではなぜか一言も觸れていないが、錢曾の入手した明内府藏本というのは、後にこの書を翻刻した阮福の跋によると、この書は南宋・建安の余氏刻本である。結局、余氏は蔡驥刻本の列女傳と、これとは別に傳えられていた顧凱之列女傳圖とを一本に結合して挿圖本の體裁にしたものと推測され、これが列女傳挿圖本の嚆矢である。

なお、江南本列女傳圖殘卷については、北宋・蘇頌の頃には列女傳圖の顧凱之以外のものの存在は確認されないの、錢曾の推測を否定する積極的な証據はない。王回の得て攷うるなしという判斷に従うよりないであろう。清・阮福は江南列女傳圖は顧凱之に本づくと考えているが、このことについては次項(九)で述べる。

(九) 南宋・建安余氏刻本と清・阮福覆宋本の繪圖について

清・道光五年（一八二五）、阮福は新刊古列女傳を刻刊した（顧凱之繪圖本、刊本②）。卷末に江藩の跋と阮福の模刊宋本

列女傳の刊本及び頤圖について

列女傳跋がある。江藩の跋の日付けは嘉慶二十五年（一八二〇）三月十一日だから、開刻から刊行まで五年餘を要している。この二跋のうち、特に阮福の跋は宋本列女傳の由來と晉・顧凱之列女傳圖の傳來とについて詳細に述べていて、ほとんどこれに盡きると思われるので、いまこれを要約して次に掲げることにする。

明の内府藏本、宋刻列女傳はもと南宋建安の余氏が刻刊したもので、以前は錢遵王（清人、名は曾）家に所藏されていたが、乾隆戊申（一七八八）には元和の顧抱沖（名は之遠、刊本①を刻刊した顧廣圻の從弟）家にあり、嘉慶庚辰（一八二〇）にわが阮家で入手した。

この書の繪圖について父上は私に次のように言った。

「わしは以前に、唐宋の人が臨寫した顧凱之列女傳圖の長卷を見たが、^②その中の衣冠や人物はこの書の繪圖と皆、同じである。たとえば衛靈公の坐している背後の低い屏風や、漆室の女が倚っている木柱は、ともに顧圖中のものによく似ており、ただわずかに省略がある。その宮室や樹木・巖石について見ると、たとえば孟母圖中の書院の類はおそらく唐宋の人が増し加えたものだろうが、それでもここにはなお唐宋の人の古制を見ることができよう。人物や馬のあぶみ、團扇の類に至っては虎頭（顧凱之の字）の洛神賦圖と全くそっくりで、晉人の繪圖に本づくことは疑いない」

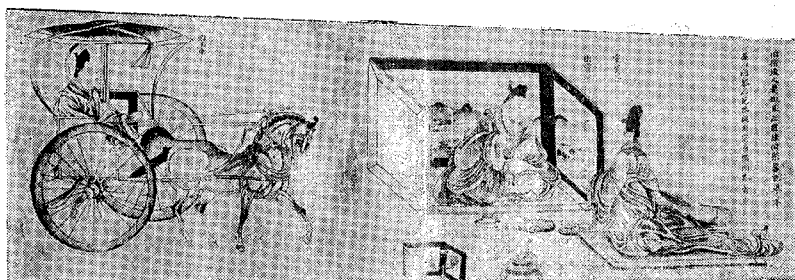
私が思うに、劉向の七略別錄に列女傳の圖は、「これを屏風四堵に畫く」とあり（資料②）、漢時、すでに列女の繪圖を屏風に畫いていたことが分り、顧凱之繪圖もやはり漢の屏風に本づいているのである。ただこの顧筆臨寫本のすべては今、見ることができないけれども、この宋本列女傳は首尾完全に備っているので、これに依つてその全てを見ることができるのである。

また、北宋・米南宮（名は芾）の南宮畫史には、唐代模寫本の顧筆列女圖を手に入れ、板に刻んで扇を作るに當り、皆、三寸餘に縮小したと書いてある。今、この宋本の傳・頌の文の部分を除いて繪圖の上下のたけを計つたら、米史に云う三寸とびつたり一致した。だから余氏刻本は、思うにこの北宋模刻本より出自し、北宋模刻本は唐模の顧虎頭本より出自して三寸に縮小したものであることは疑い無い。

顧抱冲は跋文で（刊本①の跋）、「王同序に據れば（資料②）、則ち呂縉叔等の見し所の圖は、ただに母儀・賢明の二傳のみ、後、並びによりて更に得る無し。今、この圖、蓋し余氏の補ふ所の繪なり」と述べているが、これはほとんど當っていないだろう。唐人の臨寫した仁智等の圖は現に今に傳わつて絹紙本で残っている。呂縉叔の見た繪が特に不完全であつただけのことで、王同や呂縉叔の言葉を根據として、かえつてこの本の繪圖を疑い、南宋の人が補つた繪であるとするわけにはいかない。

さて、漢の屏風は今、見ることはできないが、これは顧虎頭本に残つた。顧虎頭本は全てを見ることはできないが、北宋三寸板扇本に全てが残つた。北宋本は今、見ることはできないが、幸いにもこの南宋余氏本に見ることができるのである。

又、思うに、錢遵王の讀書敏求記に宋本列女傳³³のことを記して、「卷首に、晉司馬大將軍顧凱之圖と標題し、卷末の一條に云ふ、一本、永樂二年（一四〇四）七月二十五日、蘇敬叔、買ひ到ると。當時の、書籍を採訪するや、必ず采買人の氏名を貼すること、鄭重にして苟しくもせざること此くの如し。此れ内府珍藏の、人間に流落し展轉して余に歸するを得」と云う。今、この本の卷末の餘白にはつきりとまだ残つており、この本が遵王の所藏していた明の内府本であることは疑いない。



故宮博物院藏 顧凱之(傳)列女傳圖 卷三仁智傳・衛靈夫人圖

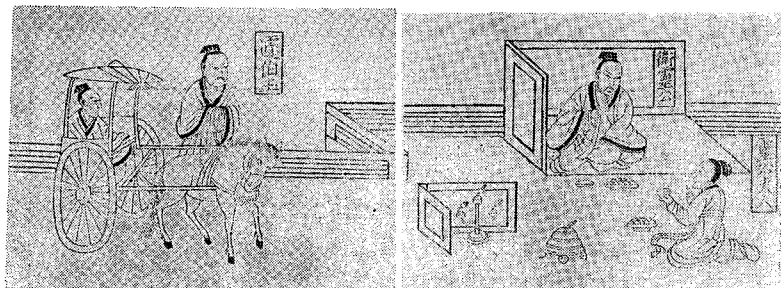
私の九妹、季蘭は紙を用いてこの繪圖を素描し、毛髪のひとつじに至るまで盡く模寫した。私はまた腕の長い職人に命じて、傳・頌の文を字體・行數など體裁そのままに寫しとらせて、圖と合せて梓に付したのである。

この冊の舊は蝴蝶の裝の體裁で、ちょうど昨今の洋裝本のように兩翼が一對に合う形になっていたが、今、模刻したこの本は、中を折り反して兩翼が背中合せの恰好となった。線裝にして今書の形式にしたので、宋人の蝴蝶の裝と反對にならざるを得なかったのである。

顧千里(名は廣圻)の校本(刊本①)はただ傳と頌だけを刻刊して圖畫には及ばなかったが、卷末に附した考證は極めて精確である。今、私が模刻したこの本は殊に圖畫を重點としているので、考證の方は顧千里の校本に備っている。

今、中國歷代繪畫・故宮博物院藏畫集所收の顧凱之列女傳圖と阮福翻刻の列女傳圖とを比較してみると、前者の流麗に對して後者の稚拙は素人目にも明らかである。この阮福翻刻圖について、先に擧げた文物參考資料の論文には概略、次のように述べている。

清・阮福刻本の古列女傳挿圖は、顧凱之畫の模寫本に依って更にこれを寫し取って翻刻したものが、何回かの模寫を経て増刪があるため、顧圖



清・阮福刊宋本列女傳 卷三仁智傳・衛靈夫人圖

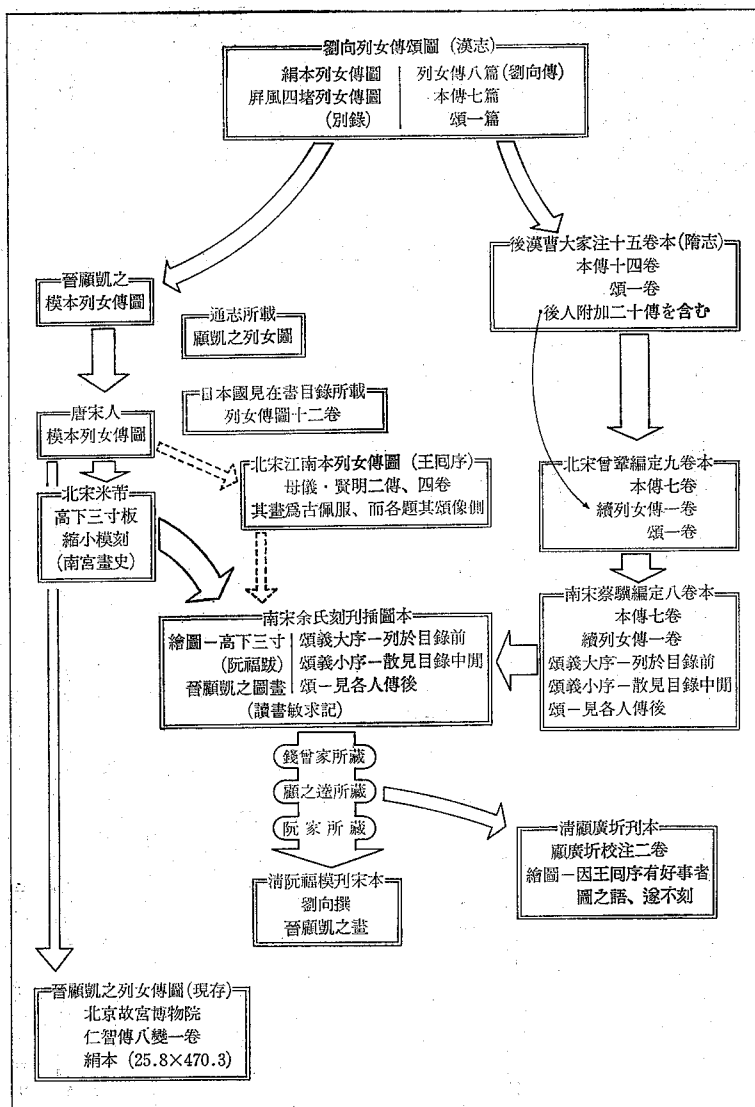
の面目を全く失っている。衣冠服飾、宮室、器物は六朝前の制度と合わないし、表現技法も異なる。ただ、その中の仁智圖の部分は故宮博物院藏模本と人物の形態や構圖など幾つかの點で、完全に一致するところがあって、背景を増加したり服飾を改變したりして眞を失っているが、間違いないく宋代の模本、それも比較的完全な模本に依據していることが分る。

阮福の「毛髮のひとつじに至るまで盡く模寫した」という言葉を信用すれば、背景の増加や服飾の改變は北宋三寸縮小版の時か南宋余氏の刻刊の時に行われたことになる。顧之遼が、「この圖、蓋し余氏の補ふ所の繪なり」と推定したのは、實は半ば當っているとも言えよう。

なお、宋本列女傳（余氏刻本）が顧之遼家に所藏されていたとき、顧之遼の從兄、顧廣圻がこれを翻刻して刊行したが（刊本①）、開刻するときに、王同序に「好事者、圖を爲す」の語があるところから、結局、上方の繪圖は刻さなかったと云う（江藩跋）。

まとめ

以上、各項目に分けて考究したところを、便宜的に圖示すれば次のとおりである。



注

- (1) 北海道中國哲學會「中國哲學」資料專刊第五號 宮本勝・三橋正信共編 東京・東豐書店刊 昭和五七年八月二日發行
- (2) 北海道中國哲學會刊、昭和五七年八月一日發行
- (3) 續修四庫全書提要・史部
- (4) 列女傳與其作者（中國婦女論文集成）臺灣商務印書館發行（所收）
- (5) 同上論文
- (6) 覆宋本是「古列女傳目錄序」、なおこの文は、南豐先生元豐類藁卷十一序（四部叢刊初編所收）及び唐宋八家文讀本にも收められており、みな目錄序となっている。
- (7) 明史藝文史、古今列女傳三卷、永樂中、解縉等編。また續修四庫全書提要・史部參照。
- (8) 續修四庫全書提要・史部參照。
- (9) 元・程榮批注に「不別出續列女傳之目」と云うように、九卷の内容は古列女傳八卷、續列女傳一卷である。②宋志著錄九卷も同じであろう。
- (10) 今本には無く、刪去された部分である。清・錢侗の崇文總目輯釋小引に「嘉定時、蔡驥刻列女傳、首簡亦引之、則知此書宋時原未有闕。後世傳鈔者、因其繁重刪去」とある。
- (11) 初學記二五、太平御覽卷七〇一、俱に引く。

北大文学部紀要

- (12) 晉の人。清・鄭珍の巢經巢經說（皇清經解續編所收）の「蔡母遷孟子注」の項に、「余按、通典九十五言、晉哀帝與甯中、哀靖皇后有章太后之喪。尙書奏、至尊經麻三月、皇后齊衰周。蔡母遷駁云云。則遷是晉穆哀時人」と考證している。
- (13) これも同上論文で指摘しているもので、史記卷四十三趙世家に、「王夢見處女鼓琴而歌詩曰、美人發榮兮、顏若若之榮。命乎命乎、曾無我羸」とあり、この詩は列女傳卷七趙靈吳女では「美人發榮兮、顏若若之榮。命兮命兮、逢天時而生、曾莫我羸羸」となっているが、蔡母遷は「若」の語を注して「陵若之草其華紫」と云い、「命乎命乎（命兮命兮）」以下の句を解釋して「言有命祿、生遇其時、人莫知己貴盛盈滿也」と云っている。圈點部の對應から見て明らかに列女傳の注である。
- (14) 新唐書藝文志の注釋書の記載形式は、自注形式の他に例えは論語鄭玄注十卷、王肅注論語十卷などのように必ず「注」と明記している。
- (15) 清・黃本驥の歷代職官表卷三に據ると、宋代、翰林院に史館編修の官があり、これに當るか。
- (16) 元豐類藁卷十一には列女傳目錄序の他に、新序目錄序・梁書目錄序・禮閣新儀目錄序・戰國策目錄序・陳書目錄序・唐令目錄序・南軒齋目錄序・徐幹中論目錄序・說苑目錄

列女傳の刊本及び頌圖について

序・鮑溶詩目錄序がある。

(17) 南豊先生元豊類藁卷十二・序、所收

(18) ここに引く崇文總目の文も今本では刪去されている。

(19) 蕭子顯の南齊書と李百藥の北齊書。

(20) 拙稿「劉向と列女傳」(中國哲學第十一號) 参照。

(21) 孟子萬章下「頌其詩、讀其書」の注。

(22) 漢書の舊注において「師古曰」と言わないものはすべて班固の自注である。

(23) 顏氏家訓・書證第七

(24) 藤原佐世の日本國見在書目錄・雜傳家に、「列女傳十五卷、劉向撰、曹大家注。列女傳頌一卷、劉歆撰」とある。

(小長惠吉・日本國見在書目錄解說稿附同書目錄八小宮山出版Vに依った)

(25) 説文「堵、垣也。五版爲堵」、段注「詩毛傳曰、一丈爲板、五板爲堵」

(26) 後日談として論衡卷二十須頌篇に「宣帝之時、畫圖漢列士、或不在於畫上者、子孫恥之」と見える。その他、後漢の例では、後漢書蔡邕列傳「光和元年、遂置鴻都門學、畫孔子及七十二弟子像」、玉海卷五七藝文・圖繪名臣「益州記、成都學有周公禮殿、舊記云、益州刺史張收畫盤古三皇五帝三代君臣與仲尼七十弟子於壁間」など。

(27) 平津館叢書甲集所收

(28) マイケル・サリバンの中國美術史によると、漢代の代表的繪畫は、「製紙の技術は中國で前漢の末ごろに發明されてきたが、繪畫はいぜん絹に描かれていた」という(新

藤武弘譯、新潮選書一二五頁)。

(29) 今本はみな貞順に作る。

(30) 金維諾「顧愷之的藝術成就」

(31) 卷末の第三の跋は署名は無いが印章によって明末清初の梁清標と知れる。この梁清標が葉隆禮のことを「葉士則(士則は字か)近世好事家」云々と述べている。

(32) 阮福目注に、「福案、家大人編定內府書畫時、所見不止一卷、有仁智等圖」と云う。

(33) 同じく錢曾の述古堂藏書目に「劉向列女傳八卷二本、宋板」を録している。他にも清朝の藏書家の目錄に宋本列女傳を載せているものは多い。錢謙益・絳雲樓書目「宋板古列女傳顧凱之圖十五卷」、李振宣・季滄葦藏書目「延令宋板書目、劉向列女傳八卷二本」、汪士鐘・藝芸書舍宋元本書目「宋版書目、古列女傳七卷、續一卷」など。錢謙益の十五卷本というのはいかなるものか不詳。

なお、本稿は昭和五十八年度文部省科學研究費一般C「漢代における女性の倫理・道德に關する研究」の研究成果の一部である。